

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

徹選択集の念仏義

― 選択本願念仏説の宣揚 ―

柴 田 良 道

聖光は、法然の六十五才の時、建久八年三十六才にして、その弟子となつたのである。法然はあたかも、その

翌年「選択集」を著わしてその念仏義の真髄を論述した。この選択集は、藤原兼実のために作られたもので、その末尾の文によつて知られる如く、一般への公開は、なされなかつたのである。

しかし聖光は、その撰述の翌年、正治元年、法然よりこれを相伝しているのであり（聖光上人伝による）自からその事を「徹選択集」の上に述べ

「上人又告言、有我所造之書、所謂選択本願念仏集是也。欲以此書秘伝汝也。（中略）已造此集畢以進殿下。殿下告上人言、今此書者浄土宗之奥義也。上人在世之時從禪室草庵勿令披露。大師入滅之後從博陸槐門可弘通之、源空雖蒙此炳誠、露命難定今日不知死明日不知死。故以此書密付属汝、勿及外聞。云云爰弟子某甲低頭举手合掌恭敬、跪以賜之畢。歡喜余身随喜留心。伏以難報仰以難謝非當伝義理於口決、復被授造書於眼前。解行有本文義已足。自其以降往生之願弥深、念仏之行倍高。（浄全第七ノ九六頁）

といつて深いよろこびの念を披瀝している。即ち聖光は

選採集撰述の後、その会座に参じたものをのぞいては、門弟の中誰よりも早くこれを相伝したのである。

その後聖光は元久元年八月、四十三才にして九州に帰郷するまで、六年間、入門以来八年間法然に師事して浄土の奥旨を伝承した。従つて、この徹選採集は、その相伝した選採本願念仏説を宣揚したものに他ならないのである。

さてその上巻の初頭に念仏に三義があることを示している。これは念仏に諸師所立の念仏と善導所立の本願念仏と法然所立の選採本願の念仏との三種あることを示し、法然の立てた選採本願念仏の義が、従来の諸師や、更に善導の立てた念仏に対して、独特の意義をもつものであることを、明らかにしようとしたものである。即ち選採というところに法然の念仏義の独自性のあることを指摘しようとしたものである。

聖光は法然の選採本願念仏説には、善導の念仏義よりも更に進歩した深い意義があるとして、それは法然が浄土三部経異訳について検討した結果、選採の義を得たと

ころにあることを示し、これをもつて、法然の独自の主張と見たのである。

ところが又聖光は、この選採の義が竜樹の大智度論にあることを指摘し、法然の説が竜樹の説に一致することを明らかにし、それが竜樹に由来することを強調している。この竜樹の説と云うのは大智度論第三十八に出てくる文である。(大正大藏經第二十五卷三四三頁)而して更にこれに基いて

「選採本願念仏義。更以非法然上人之義即是竜樹菩薩之義也。亦非竜樹菩薩之義即是法蔵菩薩之義也。亦是非法蔵菩薩之義即是先仏之義也。先仏之義故。即是法蔵菩薩之義也。法蔵菩薩之義故。即是竜樹菩薩之義也。竜樹菩薩之義故。即是法然上人之義也。此義尤可甘心」
(浄全第七ノ八六頁)

と云つている。要約して云うならば、選採本願の念仏の義は、法然から先仏、先仏から法然まで通徹一貫した一義であると、聖光は解釈理解したのである。即ち法然の念仏義が選採という点に於いて先仏の意に一致しこれに

もとずくものであることを強調したのである。

且つ菩薩念仏三昧經によつて、選択の念仏が、一切諸仏の根本の本願であることを論証し、

「以念仏別名選択有何証文耶。答曰菩薩念仏三昧經云。此念仏三昧過去諸仏之所讚嘆也。至一切如來之所印可也。至一切諸仏之選擇也。至一切諸仏之財宝也。至一切諸仏之舍利也。至一切諸仏之本性也。已上經文此即以念仏別名選擇其証文也。」
といつてゐる。

又法然は選択集に於て、八種の選択を示しているが、その際に淨土三部經の外には、般舟三昧經の一經を引用されただけであるのに対して、聖光は徹選択集上に於て「今此外又加二十二種選擇之義也。」とし、三部經の他に文殊般若經、華嚴經、文殊發願經、十手經、大仏頂、十住毘婆沙論、往生論等の經論と数多くの諸師に従つて選擇の義を示したのである。

聖光が、なぜに法然の八種の選択に対して二十二種の選擇を行ったのであるかと言へば、聖光は、選擇本願の

念仏義が全仏教にわたるその真底を表面化し、専修念仏の法門を、全仏教の視野の上に拡大し、その一般仏教的意義を考察し、これによりて、選擇本願念仏説の奥義を顯わそうとしたからである。

又法然が、選擇集に於て、三部經及び善導によつて、本願称名の一行を唱えたのに對して、聖光が、この称名の一行を、徹選擇集下に別の念仏と名づけ、自ら大智度論にもとずく念仏を通の念仏とし、これを強調し、從別徹通の義を述べた事と同一趣旨によるのであつて法然と聖光との特異性がよくあらわれているところである。

聖光が、徹選擇集に於て表明した選擇本願念仏説の宣揚、特に念仏と諸行との關係についての論述は、他の著書に於いても見られるが、その護教的伝持の努力と、宗義研究とによつて、聖光當時における聖道諸宗からの非難と、法然門下に於ける異義邪説とに對処したところに見られるものである。

その主張なるものは、聖光自身が述べているように、元祖法然の広学博覧の智徳と、選擇集の義底の深義を顯

わしたものである、と同時に、聖光独自の見解と主張を持つものである。

来迎と臨終正念

立川道之輔

法然上人の阿弥陀経観、特にその来迎と臨終正念について述べてみようと思う。先ずその資料として『小経釈』及び『逆修説法』とを用いたことをあげておこう。

『逆修説法』にあつては、『小経』の「阿弥陀仏与諸聖衆現在其前是人終時心不顛倒即得往生阿弥陀仏極楽国土」と云う経文を引用しているのに対し、『小経釈』では「其人臨命終時阿弥陀仏与諸聖衆現在其前」までを引用している。この点両者はその経文の取上げ方に相違を示している。

『逆修説法』に於ける解釈には『称讃浄土経』の文を参照して、『小経』のキーポイントをおさえている。即

ち『逆修説法』の初七日の中に、『称讃浄土経』の「慈悲加祐^ソ令^ラ心不^レ乱^ハ既捨^テ命已^ニ即得^テ往生住不退転^ニ」(浄全九、三八五上)という一文を引用しているのである。即ち、法然は『小経』と『称讃浄土経』との文を關係^ニとして、「令^ラ心不^レ乱^ハ与^ト心不顛倒^ニ此即令^{ムル}往生正念^ニ之義也。明知^ニ非^ニ臨終正念故有^ニ来迎^ニ。由^カ来迎故臨終正念也。」(浄全九、三八五上)と述べられている。このように『逆修説法』は『小経』のポイントを心不顛倒と聖衆の来迎の二点に見出しながらも、後者を重視している。何故なら、法然は、臨終のその人が心不顛倒(正念)に住したが故に来迎があるのではなく、来迎にあづかつてこそ臨終に正念に住することが可能になるからであると説いているからである。この法然の説は、吾人が、来迎は衆生の称名念仏の功德の結果として、心不顛倒となることを得、その故に臨終の時に来迎があるものだと思ひこんでいる既成概念を打破してくれるのである。

『小経釈』にあつては引用した経文について二意あり